書評

星乃治彦『欧州左翼の現在ー欧州統合と「グローバル化」の中のポスト・コミュニズム』（発行：日本図書刊行会、発売：近代文芸社　2002年）　田村栄子

1989 年 11 月 9 日のベルリンの壁の崩壊、翌年 10 月 3 日の旧両ドイツを統合した（新）ドイツ連邦共和国発足、1991 年末のソビエト社会主義共和国連邦の解体により東欧社会主義体制が崩壊したとき、「社会主義の終焉」が語られたり、「社会主義とは何であったか」が問題とされた。そうした議論においては、「社会主義」は「過去」の歴史的事象であったとする考えが論壇の圧倒的多数派であった。

そうした空気が持続しているいま、火中の栗を拾うかのように、「欧州左翼」「ポスト・コミュニズム」を語ろうとする著者星乃治彦氏にとって「社会主義」とは何であるのかを紹介することからこの小論を始めたい。

1998 年 3 月に、本書の著者は「現在は、社会主義を論じる環境としては最悪である」という巻頭言で始まる『社会主義と民衆ー初期社会主義の歴史的経験』（大月書店）を出版した。ここでいう「初期社会主義」とは、産業革命の進展という「歴史的環境の中で」裕福な「あいつら」に対する、貧困に苦しむ「われわれ」労働者の階級連帯の思想と行動として形成され、20 世紀の 20-40 年代に「全盛期」を迎え、第二次大戦後の産業・社会構造の変化のなかで「変容過程」に入り、「われわれ」の意志と社会主義国家の政策との矛盾が拡大していくなかで 1989 年に崩壊していく「一つの社会主義」である。それは「自由主義と市場経済」、もっと具体的に言えば「経済発展」「豊かな生活」が民衆に心地よく響く「二〇世紀という時代」に「規定」されていた。つまり資本主義・資本家批判として出発した社会主義も、この時代制約性から自由ではありえなかったのである。

そのわずか 4 年後に本書が出版された。前著において「もしかしたら、社会主義といっしょに平等、弱者救済の理念」をも水に流したのではないか、と危惧の念を表明していた著者にとって、「初期社会主義」の「われわれ」意識は、時代状況の変容とともに変容しつつも「ポスト・コミュニズム」＝「欧州左翼」としてどっこい生きている。

著者のいう「欧州左翼」とは、社会民主主義を含めず、むしろ旧共産党の流れを汲む政党のことを指し、政治の舞台では最左翼を形成している場合が多く、多様である。交流の場として、1990 年以降「新ヨーロッパ左翼フォーラム」を形成し、欧州議会においてもフラクションを形成している。

「社会主義」を世界史的発展のなかで、「初期社会主義」→「ポスト・コミュニズム」へと把握する著者の理論構築は、極めてユニークであるが、極めて興味深い。

社会主義に関係して評者の印象に残っている二つの発言がある。一つは、数年前、なにげなくつけていたラジオから流れてきた次のような哲学者と 14 歳少女のやりとりである。「社会状況はことばでは言いつくせないほどひどかった。賃金は安物の酒で支払われることもざらだったし、たくさんの女性が売春して生活費の

足しにしなければならなかった。…」「ひどい、頭にくるわ」「マルクスも頭にきた。同じ時代に、ブルジョワの子どもたちは風呂に入ってさっぱりしたあと、暖かい広間でヴァイオリンなんかをひいて …フルコースのディナー … 昼は馬で遠乗り … 」「そんなの不公平よ」「マルクスも不公平だと思った」。これは哲学史ファンタジー『ソフィーの世界』(NHK出版、1995年、
507-508頁)の「マルクス」の部分であり、「初期社会主義」精神の表現の仕方に評者は新鮮な驚きを覚えたものだった。 初期社会主義は歴史的事実としては、崩壊した。「崩壊」について、ウォーラーステインはこう考える。「歴史的社会主義」に対する「告発は、これらの党の保護のもとに存在した国家体制の歴史的評価としては大部分正しい」が「しかし同様に、これらの党の保護下にない多くの体制もまた、国家の権威を恣意的に利用し、国家のテロすら行ない、… 結果として社会的価値を抑制してきたことは疑いない。」社会主義「諸国家は決して自律的な存在ではなかったし、常に資本主義経済の枠組みの中で、国家間システムに制約されて機能したということ」であり、そのシステムは「無限の資本蓄積を優位においているからである」(『ユートピスティクス－21世紀の歴史的選択』藤原書店、1999年、115-119頁)。

以上二つの「初期社会主義」の誕生と崩壊についての発言は、著者の見解に近いと思われる。

では、あらたな社会主義として台頭している「西欧左翼」は現存システムに対して、いかなるオールタナティブを示しているのか。本書は、4部から構成され、「第1部　欧州左翼」においては、「グローバル化」とヨーロッパ統合の中で欧州左翼は何を目指そうとしているのか、その理論的特質が検討される。「第2部　欧州左翼の現在」においては、欧州諸国における左翼のそれぞれの政治的思想方向と政治勢力としての現状が俎上にのせられる。一言で言えば、実に多様であり、その多彩さ・独自性の強さは「初期社会主義」とは大いに異なる点である。「第3部　ドイツ左翼の挑戦－ドイツ統一からヨーロッパ統合の中の左翼勢力」と「第4部　インタビューによる新しいドイツの左翼イメージ」においては、著者の専門研究領域であるドイツに焦点をあててその左翼政党である「民主的社会主義党（PDS)」(以下、PDSとする）の形成過程と思想内容、政治勢力としての現状が語られる。

西欧左翼は政治的方向や思想内容において多様であるが、その理論に共通するものを著者は第1部において、社会的公正さの実現と民主主義の拡大、徹底した平和主義とする。1990/91 年の湾岸戦争から始まるヨーロッパにおける戦争・内戦の危機、その頃からいっそう強まる「グローバル化」(著者が括弧つきで使う場合は、グローバル化のマイナス面の、企業などの世界規模化）の進行、そのもとでの欧州統合の「戦争のない共同体作り」という当初の理想主義から「経済的に強い欧州建設」への重点の移行というように、初期社会主義の崩壊の時期は、新たな戦争の危機、民族対立の激化、富める国・人と貧しい国・人の格差の拡大、失業・移民問題の時期に重なる。西欧左翼は、上記3点を軸にしつつ、「グローバル化」反対運動を進め、ときにはその荒波から弱者を守るために国家への期待をも示し（「左翼ナショナリズム」)、「成長神話」のくずれから環境・女性・平和を要求主眼とする「新しい社会運動」＝「緑」と

も連帯する。

さて、「ドイツ左翼」は、健在か。旧西ドイツにおいては、1956 年に共産党は非合法化され、旧東ドイツにおいては、形式的多党制のもとで、実質的には旧社会主義統一党の一党独裁体制であった。この極端な二分状態にあった左翼は、統一ドイツの出現によりどうなったか。19 世紀末からヴァイマル時代にかけてのドイツは初期社会主義の強力な国であった。その歴史は、様相こそ異なっても、引き継がれているのか。

旧著『東ドイツの興亡』(青木書店、1991 年）において、旧東ドイツにおける民主化運動の展開と統一ドイツへの帰結を、具体的な発言（ビラ含む）と行動に基づいて明らかにした著者は、それを踏まえて、旧社会主義統一党からPDSへの、苦悩と展望を孕んだ脱皮を理論的行動的に追っている。

旧社会主義統一党は解党されることなく、党員激減のなかで、反民主主義的抑圧的な旧体制の政権党との断絶をあいまいにしたまま、綱領改訂、指導部交替、組織の編成変えをして、PDSと改称された。このことはPDSに負の遺産としてついて回る。92 年 1 月に始まる国家秘密警察（シュタージ）の文書公開のもとで、「犯罪」の担い手という攻撃にさらされ、壊滅の危機に見舞われる。

しかし、PDSはこの危機から脱出し、一定の躍進をしていく。98 年総選挙では西側からの支持も獲得して 5%条項を突破して 37 議席を獲得し、東側の 1 州で社会民主党と連立与党を組み、1 州で閣外協力し、そしてついに 2002 年 1 月には首都ベルリンにおいて、社会民主党と連立政権を組むことになった。その躍進の理由を著者は以下のように述べている。1.湾岸戦争、コソボ問題において、PDSが絶対平和の立場を貫いたこと。2.東側住民の間で、旧西側との労働・生活条件、心理的格差の非解消、大量失業に見舞われるなかで、立ちのぼってくる「東側にもよい面があった」という東側住民感情の受け皿として信頼されたこと。3.底辺民主主義の姿勢をつらぬき、党員外の支持者も含めた作業グループの立案・行動力の重視。選挙においても党員外のものをも党の候補者にするというオープン・リスト方式。4.反ファシズム統一戦線の失敗、68 年の学生反乱・69 年の政権交替、89 年の東ドイツ住民の民主化運動の歴史的経験に学んで、知識人との対話、他党派との対話・協力の持続的模索。5.現状に対するオールタナティブな存在となるための持続的理論的模索。6.党員の若返りと女性の進出が見られ、支持層についても産業労働者から、健康教育文化関連のサラリーマンと公務員、インテリ、学生に移行していく傾向があること。

このように記せば、バラ色の未来が約束されているかのように思われるが、著者もPDSに生じている困難に盲目ではない。党内プルラリスムスは、党内対立の危険性を内包し、与党・閣外協力の実現は、政治的オールタナティブな存在としての価値とどう調和させるかという難問を提起し、そのことをめぐつて党内対立も生じる。さらに旧政権党時代からの党員と、その時代をしらない若い世代との対立。

そして、こうした困難が、2002 年 9 月 22 日の総選挙において、露呈された。社会民主党・90 年連合／緑の党連立政権の首相シュレーダーが、国民の平和への熱い願望に敏感に反応して「イラク攻撃不参加」を鮮明に打ち出して、辛勝した。絶対平和の唯一の主張者であったPDSは、おかぶを奪われた形で、大幅に後退した。

しかし、見方を変えれば、自党の主張が国民的広がりをもつようになった証しともいえる。

本書は、模索の続く欧州、とりわけドイツ左翼の存在で政治がおもしろくなっていることを感じさせてくれる。社会民主党員ジャーナリストのバイネルトのPDS元議長ギジとの対話（『PDS－不死鳥か灰か』）やギジの「モダンな社会主義的政策に向けた 12 のテーゼ」などの史料は、現状とどう切り結ぶか、という思想的模索が示されていて刺激的である。

日常の生活レベルや教育をも含む文化状況に左翼は、どのような影響を与えているのであろうか。極右は低学歴の青年層に多いという。PDSは、この問題にどう対応しているのであろうか。続稿を期待したい。